

大分県玖珠郡玖珠町・竹田市方言の動詞テ形における形態音韻現象

The Morphophonological Phenomenon of the Te-Form Verb
of the Kusu-Machi, Kusu-Gun and Taketa-Shi Dialects of Oita Prefecture

有元 光彦*

ARIMOTO Mitsuhiro

【要旨】 本稿では、大分県玖珠郡玖珠町及び竹田市の2方言を対象とし、それらの動詞テ形に起こる形態音韻現象（テ形音韻現象）を記述する。動詞テ形の方言データを記述・分析した結果、2方言とも非テ形現象方言（タイプN2方言）であることが分かった。ただ、竹田市中方言では、s語幹動詞に音節数条件が課されている。方言システム崩壊の観点から見ると、その他の方言には音節数条件がないため、この地域では急速に崩壊プロセスが進行していると考えられる。また、地理的には、大分県の大部分の地域がタイプN2方言であるが、熊本県境に近い地域ほど、擬似テ形現象方言が残っている。このことから、熊本県天草地域を中心とした周圈的な移行分布を成していると言える。

【キーワード】 玖珠町, 竹田市, 動詞テ形, 形態音韻現象, 方言システム崩壊

1. はじめに¹

本稿の目的は、大分県玖珠郡玖珠町（くすまち）及び竹田市（たけたし）方言の動詞テ形（「～して」の形）を対象とし、そこに起こる形態音韻現象（「テ形音韻現象」と呼ぶ）を記述することにある。

九州方言のテ形音韻現象の研究は、有元(1989)を嚆矢とし、有元(2007)にその研究の中間段階がまとめられている。有元(2007)によると、テ形音韻現象は次のように定義されている。

- (1) テ形音韻現象：動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

この現象の引き金となる「動詞の種類」は、動詞の語幹末分節音(stem-final segment)の違いに

* 山口大学国際総合科学部 arimoto@yamaguchi-u.ac.jp

¹ 本稿の一部は、独立行政法人日本学術振興会・科学研究費・基盤研究(C)「九州方言音韻現象における方言形成と方言崩壊の非対称性に関する研究」(No. 22K00588)の成果によるものである。インフォーマントの紹介及び調査の実施においては、玖珠町及び竹田市の教育委員会に大変お世話になった。記して感謝申し上げる。なお、本調査は国立大学法人山口大学・人一般研究審査の承認(管理番号:2022-099-01)を得て実施されたものである。

よって分類される。有元(2007:99)では、初期の生成音韻論(Generative Phonology)の枠組みを採用し、(2)の「e 消去ルール」を仮定している (cf. Chomsky & Halle 1968, Kenstowicz 1994)。

(2) e 消去ルール：語幹末分節音が X でない動詞語幹に、テ形接辞/te/が続く場合、テ形接辞 /te/の/e/を消去せよ。

すなわち、(2)の X の違いによって、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声の種類が異なるのである。共通語の「テ」「デ」に相当する部分には、例えば促音、撥音、[tʃi], [tɕi]などが現れる。

さらに、これらの様々な音声の現れ方がいくつかのタイプ（「方言タイプ」と呼ぶ）に分類されることが判明している。有元(2020b:4-8)では、方言タイプを(3)のようにまとめている²。

- (3) a. 真性テ形現象方言：TA, TA#(=TB), TA##, TC, TD, TD'', TE, TF, TG
- b. 擬似テ形現象方言：PA, PA#, PA#2, PA##, PA', PD', PD'', PD''', PG
- c. 全体性テ形現象方言：W1, W2
- d. 非テ形現象方言：N1, N2

(3a~d)の最初に書いてある「真性テ形現象方言」などは、大分類の名称である。それぞれの右側に書いてあるラテン文字の記号は、それぞれの大分類の中の下位分類である。

また、下位分類にあるダブルクロス(#), プライム(')は、それらの数によって方言タイプが異なることを示す。ダブルクロスは、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声の種類が異なっていることを区別している。一方、プライムは、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に同様の音声が見られるが、その出現が動詞の種類によって異なっていることを区別している。

さて、本稿の目的は玖珠町及び竹田市方言のテ形音韻現象の記述であるが、具体的には、共通語の「テ」「デ」に相当する音声としてどのような音声が現れるのか、その結果両方言はどの方言タイプに属するのかについて解明していく。

2. 言語データについて

本稿で対象とする言語データは、2025年9月の現地調査によって収集したものである。

九州方言の方言区画としては、糸井(1983:242-244)によると、玖珠町方言は「日田・玖珠方言区域」である。地理的には、大分県中西部の山間地域に位置している。一方、竹田市方言は、糸井(1983:242-244)には明記はされていないが、おそらく「大分主流方言区域」であろう。地理的には、大分県南西部の山間地域に位置している。

動詞語幹の種類及び基底形(underlying form)は、(4)のように設定する。

² タイプ PA#2 方言は、有元(2024)で長崎県対馬市佐護方言に対して仮定しているが、未調査の部分が多い。

(4) 動词语幹の種類・基底形

- a. 子音語幹動詞：/kaw/<買う>, /tob/<飛ぶ>, /jom/<読む>, /kas/<貸す>, /kak/<書く>, /kog/<漕ぐ>, /tor/<取る>, /kat/<勝つ>, /sin/<死ぬ>など
- b. 母音語幹動詞： /mi/<見る>, /oki/<起きる>, /de/<出る>, /uke/<受ける>など
- c. 不規則語幹動詞： /i/~it/<行く>, /ki/<来る>, /s/<する>

言語データは音声記号によって表記する。適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*は、その音声形が不適格であることを表す。記号&は、聞いたことはあるが使わないとインフォーマントが判断していることを示す。また、記号%は、複数ある適格な形の中で、相対的によく使う形を表す。音声形の直後に、「(男)」「(古)」とあるのは、それぞれ「男性が使用するもの」「自分より古い世代が使用していたもの」とインフォーマントが判断していることを示す。また、表中の記号-----は、未調査であることを表す。なお、未調査であっても、論旨に影響はない。

本稿では語幹末分節音が α である動詞を「 α 語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が/k/である動詞、/kak/<書く>は「k語幹動詞」と呼ぶ。「 i_1, e_1 語幹動詞」は、語幹が1音節であるi, e語幹動詞を、「 i_2, e_2 語幹動詞」は、語幹が2音節以上のi, e語幹動詞をそれぞれ表す（インデックス数字が付いていない場合は両方を含む）。

3. 分析

本節では、各方言におけるテ形音韻現象を記述していく。

3.1. 玖珠町方言におけるテ形音韻現象

本節では、玖珠町方言として、大隈（おおくま）方言及び小田（おた）方言のテ形音韻現象を記述する。両地域は、いずれも中西部に位置している。大隈方言のインフォーマントは男性・70歳、小田方言のインフォーマントは女性・75歳である（年齢は調査時のもの。以下同様）。

まず、動詞テ形のデータを【表1】に挙げる。また、【表1】から、共通語の「テ」「デ」に相当する部分だけを抜き出したものが【表2】である。

【表1,2】から分かるように、すべての動詞において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分には[tʃi], [ɕʃi]のみ現れている。*[kokkita]<買って来た>など、促音や撥音が現れる形は現れない。また、大隈方言と小田方言で違いは見られない。

このことから、玖珠町方言のテ形接辞の基底形は/ti/と仮定できる。また、(2)のような「e消去ルール」は存在しない。しかし、[tʃi], [ɕʃi]のどちらが現れるかについては、動詞の語幹末分節音の有声性が関連する。有元(2007:113)によると、(5)のようなコアルールが適用されると仮定できる。

【表 1】 玖珠町方言の動詞テ形

語幹		テ形		意味
形式	意味	大隈方言	小田方言	
kaw	買う	ko:ɸjikita	ko:ɸjikita	買って来た
tob	飛ぶ	tonɸjikita	tonɸjikita &tsu:ɸjikita (男・古)	飛んできた
jom	読む	jonɸjikita	jonɸjikita	読んで来た
kas	貸す	kaɸitɸjikita	kaɸitɸjikita keɸitɸjiminai	貸して来た 貸してみろ
kak	書く	kaitɸjikita	kaitɸjikita ke:ɸjimijo	書いて来た 書いてみろ
kog	漕ぐ	koidɸjikita	koidɸjikita	漕いで来た
tor	取る	tottɸjikita	tottɸjikita	取って来た
kat	勝つ	kattɸjikita	kattɸjikita	勝って来た
sin	死ぬ	ɸinɸjikuri:	ɸinɸjikuri: ɸinɸɸjimaε	死んでくれ 死んでしまえ
mi	見る	mitɸjikita	mitɸjikita *mittɸjikita	見て来た
oki	起きる	okitɸjikita	okitɸjikita *okitɸjikita	起きて来た
de	出る	deɸjikita	deɸjikita *dettɸjikita	出て来た
uke	受ける	uketɸjikita	uketɸjikita *uketɸjikita	受けて来た
i~it	行く	itɸjikita	itɸjikita &itɸjikita (男)	行って来た
ki	来る	kitɸjikuri:	kitɸjikuri: (男)	来てくれ
s~se	する	ɸitɸjikita	ɸitɸjikita *setɸjikita	して来た

(5) 有声性順行同化ルール：語幹末分節音が有声音であるとき、形態素境界を挟んで直後の子音を有声音にせよ。

このルールによって、語幹末分節音が/b, m, g, n/のとき、テ形接辞/ti/の/t/が有声音/d/に交替し、/di/となり、最終的に音声形[ɸɸi]として現れるのである。

以上より、玖珠町方言は「非テ形現象方言（タイプ N2 方言）」であると考えられる³。

³ 有元(2007:106-123)では、「タイプ N2 方言」を「タイプ NB 方言」(旧名称)と呼んでいる。

【表 2】 玖珠町方言の動詞テ形における共通語の「テ」「デ」に相当する部分

語幹末 分節音	「テ」「デ」に相当する音声	
	大隈方言	小田方言
w	tʃi	tʃi
b	ɕi	ɕi
m	ɕi	ɕi
s	tʃi	tʃi
k	tʃi	tʃi
g	ɕi	ɕi
r	tʃi	tʃi
t	tʃi	tʃi
n	ɕi	ɕi
i ₁	tʃi	tʃi
i ₂	tʃi	tʃi
e ₁	tʃi	tʃi
e ₂	tʃi	tʃi
it	tʃi	tʃi
ki	tʃi	tʃi
s	tʃi	tʃi

3.2. 竹田市方言におけるテ形音韻現象

本節では、竹田市方言として、中（なか）方言及び玉来（たまらい）方言のテ形音韻現象を記述する。中地域は竹田市の北東部に、玉来地域は竹田市の南西部にそれぞれ位置する。中方言のインフォーマントは男性・84歳，玉来方言のインフォーマントは女性・72歳である。

まず、動詞テ形のデータを【表 3】に挙げる。また、【表 3】から、共通語の「テ」「デ」に相当する部分だけを抜き出したものが【表 4】である。

【表 3, 4】から分かるように、すべての動詞において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分には[tʃi], [ɕi]のみ現れている。ただし、中方言と玉来方言で異なる点が1箇所だけ観察される。それは s 語幹動詞である。中方言では、*[kafitʃikita] <貸してきた>が不適格である一方で、[okofitʃikita] <起こしてきた>は適格である。これは、有元(2007:212)では、(6)のように仮定されている。

(6) 音節数条件：1音節語幹の場合は排除される。

【表 3】竹田市方言の動詞テ形

語幹		テ形		意味
形式	意味	中方言	玉来方言	
kaw	買う	ko:tʃikita	ko:tʃikita	買って来た
tob	飛ぶ	tonɕikita	tonɕikita	飛んできた
jom	読む	jonɕikita	jonɕikita jonɕikuri: (男)	読んで来た 読んでくれ
kas	貸す	*kaʃitʃikita kaʃitekita	kaʃitʃikita	貸して来た
okos	起こす	okoʃitʃikita	-----	起こして来た
kak	書く	kaitʃikure	kaitʃikita	書いてくれ
kog	漕ぐ	koiɕikita	koiɕikita	漕いで来た
mog	挽ぐ	-----	moiɕikita	挽いで来た
tor	取る	tottʃikita	tottʃikita tottʃikuri: (男)	取って来た 取ってくれ
kar	借りる	kattʃikita	-----	借りて来た
kat	勝つ	*kattʃikita *kattʃikure	kattʃikita	勝って来た 勝ってくれ
tat	立つ	tattʃikuri:	-----	立ってくれ
sin	死ぬ	ʃinɕikureja:	ʃinɕikuri:	死んでくれ (よ)
mi	見る	mitʃikita *mittʃikita	mitʃikita *mittʃikita	見て来た
oki	起きる	okitʃikita *okittʃikita	okitʃikita *okittʃikita	起きて来た
de	出る	detʃikita *dettʃikita	detʃikita *dettʃikita	出て来た
ne	寝る	-----	netʃikuri:	寝てくれ
uke	受ける	uketʃikita *ukettʃikita	uketʃikita *ukettʃikita	受けて来た
i~it	行く	ittʃikita *itʃikita	ittʃikita *itʃikita	行って来た
ki	来る	kitʃikurenkana	kitʃikuri: *kittʃikuri:	来てくれ (ないかな)
s~se	する	ʃitʃikita *ʃittʃikita *setʃikita	ʃitʃikita *ʃittʃikita *setʃikita	して来た

この条件は、(2)のコアルールを初め、様々なルールに課せられることが分かっている。特に、テ形音韻現象の場合には、s 語幹動詞に対して制限を与える方言が多数ある。地域としては、長崎県五島列島や天草にしばしば観察されるが、全体像の解明は今後の課題である。

【表 4】 竹田市方言の動詞テ形における共通語の「テ」「デ」に相当する部分

語幹末 分節音	「テ」「デ」に相当する音声	
	中方言	玉来方言
w	tʃi	tʃi
b	ɕʃi	ɕʃi
m	ɕʃi	ɕʃi
s	\$ tʃi	tʃi
k	tʃi	tʃi
g	ɕʃi	ɕʃi
r	tʃi	tʃi
t	tʃi	tʃi
n	ɕʃi	ɕʃi
i ₁	tʃi	tʃi
i ₂	tʃi	tʃi
e ₁	tʃi	tʃi
e ₂	tʃi	tʃi
it	tʃi	tʃi
ki	tʃi	tʃi
s	tʃi	tʃi

以上より、竹田市方言は、玖珠町方言と同様、コアルール(5)を持ち、「非テ形現象方言（タイプ N2 方言）」であると考えられる。

4. 地理的分布と方言崩壊

第 3 節での分析を踏まえると、玖珠町方言及び竹田市方言のテ形音韻現象の方言タイプは、(7) のようにまとめることができる。

- (7) a. 大隈方言： 非テ形現象方言（タイプ N2 方言）
- b. 小田方言： 非テ形現象方言（タイプ N2 方言）
- c. 中方言： 非テ形現象方言（タイプ N2 方言）＋音節数条件
- d. 玉来方言： 非テ形現象方言（タイプ N2 方言）

本節では、九州方言全体の地理的分布を観察するために、最新版である有元(2020b:25)に、有元(2024, 2025)で得られた方言タイプ、及び(7)を加えた方言地図を【図 1】に挙げる。

【図1】では、同じ方言タイプであるため、(7)の大隈方言と小田方言、中方言と玉来方言をそれぞれまとめ、玖珠町方言、竹田市方言として、それぞれ1つずつの記号をプロットしている。

【図1】から分かるように、玖珠町方言と竹田市方言は、前述の通り、糸井(1983)の言う「大分主流方言区域」に属すると考えられる。すなわち、大分県主流方言はタイプN2方言である。ただ、現時点までの調査では、佐伯市蒲江方言にN1タイプが見られるため(cf. 有元 2025)、蒲江方言は大分県主流方言とは一線を画しているようである。また、N1タイプは熊本県阿蘇郡産山村(うぶやまむら)方言にも見られる。ただし、この方言タイプの方言話者は女性であり、男性の方言話者にはタイプPG方言(擬似テ形現象方言)が見られている(cf. 有元 2013)。

次に、玖珠町方言・竹田市方言の周辺を見ると、地理的に擬似テ形現象方言が集中していることが分かる。しかも、タイプPD''方言・タイプPG方言といった、かなり方言崩壊プロセスが進行している方言タイプが現れている(cf. 有元 2020b:24)。これらはN1, N2の方言タイプと隣接することから、方言圏論的な考え方をすると、擬似テ形現象方言から非テ形現象方言へと大きくフェーズが変わるような変化(「非テ形現象化」)が起こっていると仮定できるかもしれない。

また、タイプN2方言の周辺にはタイプN1方言も散見される。有元(2020a:268)によると、非テ形現象方言に(8)のような方言崩壊プロセスが仮定されている⁵。

(8) 非テ形現象の崩壊:

タイプN2方言からタイプN1方言への通時的変化においては、{[+back], [+cor, +cont]}
→[+cor, -cont]→[+lab]の順に崩壊が進行する。

これは、宮崎県西臼杵郡高千穂町方言の分析の結果仮定されたものであり、実際には、(8)の第1段階の交替がs, g語幹動詞にしか起こっていない。この仮説は、全体性テ形現象方言と同様の交替が起こっている可能性が高いという推測のもと、仮定されたものに過ぎないため、さらなる解明が必要である。従って、現時点では、タイプN1方言とタイプN2方言の関係は不明である。

さらに、竹田市(中)方言の音節数条件は、有元(2007:211-213)に記述されているように、「非テ形現象化」の一つであるため、方言崩壊の一つのプロセスであると考えられるかもしれない。単に音声的な現象とも捉えられなくはないが、テ形のみが起こっていることから考えると、形態音韻的な現象ではないだろうか。

5. おわりに

本稿では、玖珠町方言及び竹田市方言におけるテ形音韻現象を記述することを目的とした。その結果、いずれの地域でも、共通語に近い方言タイプ(タイプN2方言)が観察された。

また、これらの周辺地域では、擬似テ形現象方言の方言崩壊プロセスがかなり進行した段階の方言タイプ(タイプPD'', PG方言)が見られることから、熊本県に接する大分県地域に、擬似

⁵ 弁別素性(distinctive feature)は、back(後舌性)、cor(onal)(舌頂性)、cont(inuant)(継続性)、lab(ial)(唇性)である。

テ形現象方言と非テ形現象方言の境界があると考えられる。このことは、熊本県天草地域を中心とした周圈的な移行分布の仮説を証明するための一つの証拠になるのかもしれない (cf. 有元 2014)。ただ、擬似テ形現象方言が方言崩壊を被った結果、非テ形現象方言に直接変化したかどうかは不明である。

以上のように、テ形音韻現象の記述は進んでいるものの、理論的には様々な問題が残っている。今後は、さらに方言データを収集していくとともに、記述・理論の両面からのアプローチを精密に進めていくべきである。

【参考文献】

- 有元光彦(1989)「五島列島二方言の/te/形における独特な分布について—長崎県福江市下崎山町・大津町—」『九大言語学研究室報告』第10号, 九州大学文学部言語学研究室編, pp.135-152.
- 有元光彦(2007)『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』ひつじ書房
- 有元光彦(2013)「タイプPD””, PG方言の発見—熊本県北東部・大分県中西部方言の動詞テ形における形態音韻現象—」『研究論叢 (山口大学教育学部)』第62巻・第1部, pp.37-55.
- 有元光彦(2014)「音韻ルールの方言圏論」『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論』小林隆編, ひつじ書房, pp.189-207.
- 有元光彦(2020a)「非テ形現象・擬似テ形現象の崩壊に関する予備的考察—宮崎県北西部方言を対象として—」『山口大学教育学部研究論叢』第69巻, pp.261-270.
- 有元光彦(2020b)「九州方言におけるテ形音韻現象の崩壊について」『言語研究』第158号, 日本言語学会編, pp.1-28.
- 有元光彦(2024)「方言タイプPA#2の発見?—長崎県対馬・壱岐方言の動詞テ形における形態音韻現象—」『研究論叢 (山口大学教育学部)』第73巻, pp. 135-144.
- 有元光彦(2025)「宮崎県日向市・大分県佐伯市方言の動詞テ形における形態音韻現象」『山口大学国際総合科学部研究紀要』第1巻, pp. 41-50.
- Chomsky, N. & M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*, Harper & Row.
- 糸井寛一(1983)「大分県の方言」『講座方言学9 九州地方の方言』飯豊毅一ほか編 国書刊行会 pp.237-266.
- Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.